

〔論文〕

森田正馬の常識観

小川芳男

れると思量される。

1. はじめに

常識というものは、その国や社会の長い歴史のなかで育まれてきた文化である。人間は誕生すると同時に、長い間慣例化されている社会の常識に依拠して生存し、自己の生命の進展を図ろうとする。したがって、常識は人間が社会のなかで生活し、人間として成長するための不可欠の要件であるといえる。

ところで、常識には、国や社会を超越した普遍的側面と国や社会によって異なる相対的側面がある。そこで、日本の常識は世界の非常識ということもあり得るわけである。

本論文では、常識の相対的側面の探究はさて置き、常識を構成する要因について、森田正馬（1876-1938）の见解を考察・検討する。換言すれば、常識は何を根拠にして構成されているかを解明することである。これによって、常識を、人間の成長・発展に対して、どのように応用・活用すべきかが推定でき、ひいては、人間の在り方である自己実現にとつて、きわめて有効・有益な方途を提供してく

2. 常識の意義

常識という語は、英語のcommon sense（共通感覚）の訳語として『哲学字彙』（1881）に掲載されたことばである。

共通感覚はまた、一般感覚ともいわれ、五感（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）等の個別的な感覚器官が知覚する特定の感覚とは異なり、それらに共通した内容をもつ感覚を意味し、アリストテレス（Aristotelēs B.C.384-322）に由来する術語である。アリストテレスによれば、感覚というものは目的によって5つの感覚に特殊化した独自の器官をもつが、それらは本来1つのものなのである。そして、共通感覚には、①運動・静止・数・形・大きさ等の知覚。②白い物が誰のものであるかという知覚。③自分が見ている・聞いているという知覚。④白さと甘さのように異なった知覚の識別等の内容が包含される（『哲学事典』平凡社）。したがって、共通感覚はいわば、感覚・知覚と理性を結合する役割を有するのである。この役割が強調・拡大され、とくに

キケロ (Marcus Tullius Cicero B.C.106-43) を通して、社会の構成員の間に共通な (commūnis) 判断力 (sēnsus) という意味での common sense (常識) に変容するようになったといわれている (『岩波哲学小辞典』)。

現代において、常識という語は、つぎのような意味を有することばとして使われている。①一般には、特定の共同体で、ある時期に広く人々の間で承認されている意見・社会感情等の総体をいう。この意味での常識は、社会的経験の集積として社会から個人に与えられ、しかも、その根拠を問う必要のない直接自明な人間行為の社会的規範と考えられる。したがって、それは社会的統制力をもち、個人の日常行動を規定するのである。そして、社会が危機に陥れば、常識に対する反省・批判・改廃等が行われる。②学問的常識ほど厳密ではないが、それと深い関係をもちながら、社会的に固定された日常的な知識をいう。これは科学以前の一般的知識を意味し、あらゆる人間によって認められ、人類共通の真理・価値として通用するのである。③狭義には、それぞれの専門分野での研究に従事する者が、当然知っていなければならない基本的知識をいう (『哲学事典』平凡社)。

これらの意味を簡略化・要約化してみると、今日常識とは、ある社会で、人々の間に広く承認され、当然もっているはずの知識や判断力をいう (『大辞林』三省堂) と定義され、またそれは、専門的知識に対して普通人相手の一般的知識、または普通人に期待される見聞・理解力・判断力等をいう (『大漢和辞典』大修館) と解釈される。

このようにみてくると、常識というものは、

社会や国家において、長い苦難の歴史の下で形成されてきた文化遺産ともいえるべき存在であり、社会や国家の秩序の安定・維持に貢献してきたことが了解される。しかしながら、常識は万古不易な存在ではなく、一定の時代の社会や国家によって創造されたものである以上、社会や国家の変遷に伴って、当然変化することはいうまでもない。また、社会や国家によって異なる常識は、ややもすると、集団間の歪みから自己の所属する社会や国家の常識は適切・正当であり、他の集団のそれは不適切・不当とする差別・偏見を生む原因ともなる。このように、一たび人々の心の奥深くに沈殿し、定着した常識はつねに合理化・正当化され、いとも簡単に変化することはないのである。このことが、社会における人間関係および国家間の国際関係を、複雑かつ難解にする要因と考えられる。

3. 森田正馬の常識観

(1) 常識の定義

森田によれば、「常識とは common-sense の原文字の示せるが如く常人すなわち健人の有する感覚若しくは感触なりと解せんと欲す」^[1] というように、常識を、アリストテレスのいう共通感覚として把握する。そして、この感覚・感触については、「抑々吾人の身体に外界の刺激即ち物理的作用加はれば其影響は吾人の身体に生理的变化を起し即ち神経系統に興奮を起しひいて身体種々の器関に相当の変動を及ぼし、其変動の吾人の意識に上

りたる最も単純なものを感覚及び感触となす」^[2]と定義する。すなわち、外界の刺激に対する意識反応のうちで、最も単純にして基本的な反応を感覚および感触というのである。森田は、それをまた「気分」ともいう。それでは、感覚と感触のうちどちらが先に生じるのか。これについて、森田は感触が先行するとして、「例へば余が家に帰りて何となく自らはれはれしく爽快なるを感じ其原因を注意して初めて庭の植木の植木屋によりて手入されたるを気付きたる等の如く初め庭の有様を知覚領会して而して後に爽快の気分の続発するに非ず。斯く総て物の知覚認識は先づ感触より導き出さるゝ事多きが如し」^[3]という。すなわち、家に帰り、何となく爽快さを感じ得るのは、植木が手入れされているからではなく、まず家に帰ると自然に爽快な感じ・気分になり（感触）、そこでよく周囲を見渡すと、植木が手入れしてあったことがわかる（感覚）というのである。このように、ものごとに対する判断には、感触および感覚である感情が重大な役割を果たしているのである。したがって、森田によれば、常識とはまた「物に触れ事に接して起る常人の感情である」^[4]と定義される。

感情とは、発生学的にみれば、人間のうちで感覚・知覚とともに出現する最初の精神的な能力であり、その主要な機能は、ものごとについての正確な知識を取得する「認知」と、それをベースにして行われる「価値づけ」である。価値づけ（価値判断）とは、ものごとに対する好・嫌、優・劣、良・不良、善・悪、正・邪、真・偽、美・醜等を識別し、断定することである。価値判断は一般に「事実判断」とは異なり、高度の精神的な能力を必要とする

ことから、本来情操（社会的感情）・知性・理性等の機能をベースにして行われるのであるが、感情による価値判断は、主として自己の存在・存続を目的にして行われる初歩的・基本的な価値判断といえる。

森田は常識を、常人の感情と定義することから、その感情が発動しない場合を「常識なし」として、つぎのような場合を示す。すなわち、「例へば病を得て憂慮なく其病の重きや軽きやを思はず（自己保存欲）、愛なく（生殖欲）我子の何時歩行し始めたや知らず（種族保存欲）、自己生存に関係深き事物に対し何の疑問も起らず（知識欲）、終日閉居して少しも退屈倦厭を覚えず（運動欲）、小児の井に落ちんとするを見て何の感じも起らず（道徳情）、眼に美術風景を見て楽しまず（審美情）、其他恥辱を厭はず、名誉を欲せず、過去の追憶なく、前途の希望なく、羨望の心なく弥次馬の気分起らず等」^[5]をいう。そして、それらのうちの1つか2つを欠いた場合を「常識を欠く」というのである。

さて、上述した事象は、人間に生得的に賦与されているが、それには、自然に発生・成立するものと後天的に養育・育成されて成立するものがある。前者には、自己保存欲・生殖欲・種族保存欲・知識欲・運動欲等が、また後者には、道徳情・審美情等がある。したがって、後者については、とくに人間社会のなかで、幼少時からのしつけ・訓練・教育等によって成立することを銘記する必要がある。

ところで、森田は、常識があり、正常な感情に基づく判断として、「母は我々を愛す、世の人は互に相助けて成立するものなり、過食すれば食傷を起す等」^[6]を挙げ、それに対

して、非常識にして、その人の素質・境遇・精神状態等が異常である場合の判断として、「理髪師は何時我首を切り落すやを計り難し、世の中の人には総て泥棒なり、食中には毒あり等」^[7]を指摘する。このように、一般の人々の感情が正常(異常)のときは、正常(異常)な知識を獲得し、正常(異常)な判断を行い、常識的(非常識的)に振舞うのである。森田は、それを「斯く尋常一般の感情を有するものは従つて尋常一般の知識を有し判断当を失はず、異常の感情を有し若しくは尋常の感情を有せざるものは従つて異常の知識判断を有し若しくは尋常のそれを欠ぐといふ事を得べし」^[8]という。

また、常識の有・無は、人間を評価する場合の重要な判断基準にもなり得る。但しその判断は、人間を評価するだけに慎重に行われなくてはならない。森田はこれについて、「例へばこゝに人あり、或事を知らず若しくは普通の判断を誤る事ありと雖もこれを以て直ちに其人の常識なしと解する事の誤謬を避け、更に之が正当なる解釈をなさんには進んで其人の生活状態、境遇、趣味意向等を検して後初めて之が判断をなさざるべからざる事を知るべし」^[9]という。すなわち、なぜ、そのような誤った判断をするに至ったかを、その人の立場に立って検証する必要がある。そうすることによって、その判断の真意を理解することができるのである。さらに、常識をもつことは、人間が有徳な人格を有するための重要な要件ではあるが、そこにまた問題があることも事実である。これについて、森田は「例へばこゝに<自ら責むる事重く人を責むる事寛なれ>と説く人あらんに其言により之を以て直ちに常識ある人となす勿れ、或は其人は

単に道德の語の暗誦的受売となせるものならざるやを保し難く又或は其人は同情、克己の情等の常識を欠き自己の非に反省思ひ至らずして只人を責むるの具に用ゐるのみなるや知るべからざるなり」^[10]という。ここで問題となるのは、まず、道徳的用語を真に理解せず、ただ表面的・皮相的に発言しているに過ぎない人であり、つぎに、それを自己の本心とは異なる意味で使用している人である。後者は心理学的には、「反動形成」といわれ、それはある欲求・主張を隠蔽するために、正反対の行為・発言をすることである。したがって、このような人を、一見常識的なことを論述しているからといって、人格のある優れた人間と判断すべきではない。このような事実を踏まえ、森田は「人を観るに常に必ず其外面的知識や言論を以て直ちに其人の人格を知らんとするは最も危険の甚しきものにして、必ず常に其感情と実行に重きを置かざるべからず」^[11]と結論づけるのである。確かに、われわれは人間の上辺だけを見て、その人間のすべてを価値判断しがちである。しかしながら、重要なことは、人間がそのことば通りに実行・実践しているか・否かということである。換言すれば、「言行一致」・「知行合一」が人格者の人格者たる所以なのである。

(2) 常識の異常

森田によれば、常識の異常の特徴として「異常なものには先天的と後天的と、持続性と一時性と、低格欠落と倒錯不均等となどある」^[12]とし、さらに「其先天的のものは白痴、痴愚等には持続性に低格、欠落等あり。奇人、変人、天才等には持続性に倒錯不均等、超常識等あり」^[13]という。そして、超常識には、

2つのタイプがあることを指摘し、「余の所謂超常識とは例へば他人より侮辱罵言を加へらるれば相当の忿怒を発するを常識とすれども若し世を達観し常に忿怒の情を忍び、忍辱の修養積みたるものは如何なる暴慢にも平然として笑貌を以て之を迎ふるが如く又人には完全欲なるものありて例へば物を採集し或は学者が或研究問題に没頭するときは之を愈々完全ならしめんとし益々深入りし他を顧みるに違なく常人より之を見れば殆んど馬鹿気たる偏執の如く見ゆるが如き事あるも、そは其境遇事情より来りたるものにして斯の如きを称して超常識ともいふを得べけん」^[14]という。このように、超常識は、尋常なる常識を超越することを意味することから、超常識を有する者はまず、一般の人にはみられない優れた人間性・人格を有することである。すなわち、他人のいかなる罵詈雑言・謀略に対しても、超然たる態度をつねに堅持することができることである。つぎに、一般の人にはできない徹底した探索能力を有することである。これは、ものごとの発明・発見に有効であるとともに、創造的な意見・見解を形成する上で不可欠な要件である。したがって、超常識は一般の人とは異なる、奇人・変人・天才等にみられる事象といっても不思議なことではない。

また、後天的な常識の異常は精神病者のうちにみられるとし、これについて、森田は「後天的には総て精神病は其種類に従ひ持続性又は一時性に欠落倒錯等を来し、又一時性のもものは一時の感動、中毒、神経症其他の身体病等によりて常識の異常を呈する事あり」^[15]という。確かに、精神病に罹患すれば、例えば、統合失調症の主観的症狀にみられる世界没落

体験、迫害・心気・血統妄想、対話性幻聴、作為思考、影響・作為体験、観念自動性、自我所属感の喪失等の現象は、持続性・一時性の双方に問題を生じ、精神の異常を招来し、その結果、常識が崩壊することは事実である。

(3) 常識の養成

森田にとって、常識とは、ものごとに触れて生ずる感情であることから、「常識養成は即ち知識教育にあらずして感情の訓練なり」^[16]という。換言すれば、「常識養成の根本とする処は広くいはゞ即ち心身の訓練にして狭くいはゞ即ち感情の修養なり」^[17]という。

そこで、感情について考察することにしよう。まず、感情はどのような状況の下で発現・発動するのか。これについて、森田は3つの要件を考慮しなければならないとしてつぎのようにいう。

第1、身体内部の状態

小児・男女・青春期・老年・白痴・不具者・宦官等の如き身体の発育状態・又は器関の変化、或は精神病・脳病・内分泌器関の病等・種々の疾病等が関係し、其他鼻の病の時には、気分がいらいらして刺激性となり、胃病の時は、気が重く・不安となり、心臓病の時は、恐怖性となり、淋病等生殖器病の時は、陰鬱悲観的になる等、一定の身体病の反応から、種々の気分感情が現はれるのである。

第2、身心の活動状態・慣習・境遇等

忙がしく働くとか・登山とか、活動の盛んな時は、元気に溢れ・爽快の気分を生じ、閉居無為の時には、気分の沈滞を来し、ヒネクレになる。又昔の武士の家庭で、厳格の習慣をつけられたとか、裏店の貧民で、不断罵言

される事に慣れた者等は、各其性格が養はれ、或はキリスト信者とか、真宗とかで、幼時から、家庭で礼拝の習慣のつけられた者は、自ら敬神の情が養はれ、或は正月の百人一首の暗誦に慣れて、自ら国風の情調が体得されるとかいふやうなものである。

第3、外界の事情変化

吾人の感情は、当然観るもの・聴くもの・外界の変化により、千変万化に反応するものであつて、「心は万境に随て転ず。転ずる処、実に能く幽なり」といふやうなものである。散る花に、心勇み、秋の月に、あはれを催し、儲かりを喜び、人の死をはかなむとか・いふやうなものである。^[18]

このように、われわれの感情は上述した3つの要件が複雑に絡み合うことによって多種多様な形態をとって発生する。したがって、それに伴いわれわれの常識もまた、限りなく生ずることが了解されるのである。

つぎに、常識の養成は感情の訓練・修養にあることから、感情の法則について考察することは、常識の養成にとって有益なことである。森田は感情の法則として、つぎの4つの点を指摘する。①感情は常に同一の強さを以て永く持続するものにあらず、之を放任すれば自然に消失す。②感情は之が行動に変化すれば消失す。③感情は之を表出するに従ひ益々強盛となる。ランゲは吾人は悲しき為に泣くに非ず、泣くが為に悲しきなりといへり。④感情は之に慣るゝに従ひて鈍くなる。^[19]

さて、この感情の法則を理解すると、いろいろな感情を好ましい・望ましい方向に導くことが可能になる。これについて、森田は怒りの感情を取り上げ、「忿怒の情に就て云は

んに先づ吾人が忿怒の情起るとき忍びて之を表出せざれば時を経て終には自然に消失す。昔の武士に忿怒して事を決せんとするときは先づ三日間考へての後にすべしとの訓戒は此特徴の活用なり。又此忿怒の情を堪へ忍ぶは中々に苦痛なれども屢々之に慣るれば終には其苦痛の情鈍くなりて克己の情は初めてこゝに養はるゝ事を得べし」^[20]という。怒りの感情は、仏教においては「瞋」といい、「三毒」の1つとして最も忌避すべき感情とされてきた。三毒とは、貪・瞋・痴を意味し、これらは「渴愛」によって生ずる煩惱のうちで、最も悪しきものである。確かに、怒りの感情は、一たび荒れ狂うと、その人間を全く別人に変えてしまうほど強力な力をもつことから、古来最も恐れられてきた感情である。一般に、感情が知性や理性に比較して評価が低いのは、この怒りの感情の故由であるといつても過言ではない。すなわち、怒りの感情は、感情全体に対して非常に悪い印象を与え、その存在意義を低下させる起因となったのである。それに対して、怒りの感情を我慢しないで相手に表出した場合は、「忿怒の時之を表出し一言二言争へば其間次第に忿怒は激烈となり終には暴行に及ぶに至る下等社会の夫婦喧嘩に於けるが如し。斯くて忿怒の発表益々反復すれば其情は次第に起り易く一方には克己の情益々鈍くなる等の如し」^[21]という。したがって、怒りの感情をコントロールするには、感情の法則の③と④の適用が有効である。また、望ましくない・劣悪な感情といわれる嫉妬・虚栄・怨念・敵意等も、同じく感情の法則③と④によって緩和することができる。したがって、感情の法則は望ましい・望ましくない双方の感情を操作する上で、きわめて

効果があることが了解されるのである。

つぎに、実生活における困窮や過重な身体的負担・労働等に伴う感情について、森田は「粗食、薄衣、身体の労苦等の如き身体的感覚は練習によりて其苦痛に堪ゆる事を養ふべし」^[22]という。生活上の貧困や身体の労苦等は、人間が生きる上で必ず遭遇する事象である。したがって、当初は苦しいことではあるが、それらに耐えて生き抜くことは、心身の鍛錬・修養にもなり、人間の成長・発展にとって不可欠なことといえる。

さらに、一般に好ましい・望ましい感情について、森田は「運動欲・知識欲等の如きより同情、美術、徳情、社会的情等に至るまで総て之を表出する事によりて強くなり之を表現せざれば次第に萎縮鈍麻するに至る」^[23]という。このように、個人的にも社会的にも望ましい感情は、感情の法則③によって伸張・発展させることが肝要である。すなわち、望ましい感情であるだけに、人間の成長・発展にとって必要なことから、それらを社会的に表現・実践することによって益々展開させることが期待される。就中、徳情、すなわち、道徳的感情の育成は、戦後の日本においては実質的に行われてこなかっただけに、早急な対応が希求されるのである。

さて、常識の養成、すなわち、感情の養成・訓練・修養について論述してきたが、とくに留意すべきことは、いろいろな感情、すなわち、望ましい感情も望ましくない感情も、すべて同程度に所有することが必要であるということである。これについて、森田は「人格は感情の均等の状態を最も大切なる条件とするものなれば忿怒、嫉妬等の情に至るまで之を適度の均等に有する事必要」^[24]とし、その

理由を「若し其情を全く失はんとするものあらば、それは必ず野狐禪の類若しくは外道の教なりといふべく例へば忿怒根絶すれば公憤等の如きもなく人は枯木死灰の如くなり、嫉妬なければ愛情なき等の如し」^[25]という。確かに、人間にとって、苦しい身体的感情・劣悪な感情・望ましい社会感情等を均等に所有することは必要である。たとえネガティブな感情である忿怒や嫉妬でも、十分耐え忍ぶことによってそれらを義憤や愛情に昇華（純化）させ、その結果、人間の成長・発展が図られるのである。その意味で、忿怒や嫉妬の感情も、それなりの存在意義があるといえよう。したがって、ネガティブな感情を全くもたない人間を想定し、理念化することは、人間存在の真意を全く知らないことであり、それはまさに、悟ってもいないのに、悟ったつもりでうぬぼれている「野狐禪」と同一であるといえるのである。

感情（常識）を適度にして均等に所有することはまた、人間が偏らないという意味できわめて重要な意義がある。偏らないということ、すなわち、適度にバランスを保持することは、ものごとを達観し、ものごとの本質を見抜き、適切な判断を行うための基礎である。したがって、感情が適度のバランスを修得・保持することは、望ましい人間精神の基盤を形成することを意味する。すなわち、人間精神の基盤というものは、知識の注入によって形成されるのではなく、ものごとを認知し基本的な価値判断を行う感情を、偏ることなく・バランスのとれた形に創造することによって形成されるのである。そして、適度のバランスのとれた感情をベースにして、人間形成に必要な知識を修得し、高度な判断力

を涵養することによって、各人は「自己実現」の道を着実に歩むことができるようになる。これについて、森田は「若し此基礎の理を誤らざれば人は各々其自然の発達を遂げ、富めるも貧しきも日本人も亜弗利加人もよく其自己と周囲との関係を調和し、自己に必要な事を知り、不良の事を為さず、克己独立心を養ひ、将来に希望を持し、周囲に興味を有す。即ち徒らに知識を注入するに非ず、自己発展に必要な有効なる知識判断を得る基礎の精神を養成するものなりといふべし」^[26]という。

4. おわりに

常識とは、一般に一定の社会・国家のなかで、承認されている知識や判断力を意味するが、この知識はものごとに対する認知・認識であり、また判断力とは、ものごとに対する認知・認識をベースにして行われる価値判断をいう。そして、ものごとの認知・認識およびそれに対する価値づけは感情の機能であることからして、森田が常識を、ものごとに触れて生ずる感情であると定義したことは、妥当な見解といえる。

一般に知識や判断力というと、われわれの精神的能力である知性や理性の機能によって行われると考えがちであるが、その基盤は感情にあることを銘記することは肝要である。高度の精神的能力である知性や理性の機能といっても健全な感情の働きがあってこそ、はじめてその本来の機能を発揮することができるのである。その意味で、森田が常識の養成

として感情の陶冶・浄化を指摘したことは、卓見といえよう。すなわち、感情を人間の成長・発展にとって望ましい方向に育成しておかないと、その後いくら知育や徳育を実践しても、それはせいぜい悪知か狡知をつくり上げるに過ぎない結果となる。その意味で、森田のいう感情の健全な養成には重大な意義があるといえよう。

一般に人間性というとき、それは動物にはみられない豊かな感性・情操と高度の倫理性を備えることが必須の要件であるといわれている。森田は常識の養成によってこの両者を修得することを目指している。換言すれば、常識の養成は人間性の育成を目論んでいるといえるのである。このことは大変重要な意義をもつ。なぜならば、知性や理性の機能を必要とする高度の専門性は、この人間性の修得の上に構築されなくてはならないからである。これについて、私は長年防衛医大において医大生の教育に尽力してきたが、新入生は入学と同時に臨床上の業務に就くことを希求する。そのとき、私はかれらに「さるにかみそり」という諺で対応した。すなわち、新入生にメスを与えることは、まさにさるがかみそりを振回すように、きわめて危険なことであると論じたのである。換言すれば、そのメスを正しく医学・医療に活用するためには、健全な人間性の育成が先決であることを説いたのである。このように、健全な人間性の基盤の上に、知性や理性の機能を必要とする専門的事象を修得することによって、はじめてその内容が活性化・正当化されるのである。

そして、この過程はまた、「自己実現」の在り方にとっても重要なことである。自己実現とは、マズロー (Maslow, A. H. 1908-

1970)によれば、「精神的な核心、あるいは自己を受け入れ、これを表現すること、つまり、潜在的な能力、可能性を表現すること、人間性や個人の本質を活用すること。つぎにそれらはすべて不健康、神経症、精神病、基本的な人間能力の喪失ないし縮小を最小限にしか表現していないことである」^[27]という。このように、自己実現は自己に賦与された人間としての諸能力を育成・発展させることによって、自己自身がより完全な存在に生成することである。しかしながら、自己実現というと、一般に自己が他からの制約・束縛を一切排除・排斥し自己中心的に・勝手に振舞うことのように理解されがちであるが、それは究極的には、「利己的自己実現」に導く、間違った・望ましくない自己実現の形態である。それに対して、自己実現の基礎となる人間性の育成、換言すれば、感情の正しい養成に重点を置くことによって、真の自己実現である「社会的自己実現」が可能となる。なぜならば、人間性の健全な育成によって、社会性・公共性の修得が図られるからである。その意味で、森田のいう常識の養成はまた、真の自己実現を達成するための不可欠な要因であるといえるのである。

昨今のわが国の社会状況をみると、今まで経験したことのない極悪非道にして凄惨な事象・事件が頻発しているが、その主要な原因は、まさに間違った形態の自己実現である利己的自己実現によるといっても過言ではない。したがって、このような事態を早急に解消するため、新たな人間観・教育観（社会的自己実現を目指し・徳性を重視した教育の実践）を再構築し対処することが、現下の情勢からして、焦眉の急といえよう。

文献

- [1] 森田正馬：神経質者のための人生教訓。森田正馬全集, 7 ; 551.白揚社.1975.
- [2] 前掲書, 551.
- [3] 前掲書, 551.
- [4] 前掲書, 552.
- [5] 前掲書, 552.
- [6] 前掲書, 552.
- [7] 前掲書, 552.
- [8] 前掲書, 552.
- [9] 前掲書, 553.
- [10] 前掲書, 553.
- [11] 前掲書, 553.
- [12] 前掲書, 553.
- [13] 前掲書, 554.
- [14] 前掲書, 553.
- [15] 前掲書, 554.
- [16] 前掲書, 554.
- [17] 前掲書, 555.
- [18] 森田正馬：生の欲望。森田正馬全集, 7 ; 348-349.
- [19] 森田正馬：神経質者のための人生教訓。森田正馬全集, 7 ; 555.
- [20] 前掲書, 555.
- [21] 前掲書, 556.
- [22] 前掲書, 556.
- [23] 前掲書, 556.
- [24] 前掲書, 556.
- [25] 前掲書, 556.
- [26] 前掲書, 556.
- [27] A.H.Maslow, Toward a Psychology of Being, D.Van Nostrand Company, INC, 1962, P.184.